

水稻新品種「西南136号」の栽培法

○山根一城・森浩一郎・佐藤光徳<sup>1)</sup>・若松謙一  
(鹿児島農総セ・<sup>1)</sup>鹿児島農総セ徳之島)

【目的】

本県の早期栽培地帯で最も多く作付けされている「コシヒカリ」は、良食味であるが、耐倒伏性が劣り、収量性が低い欠点がある。また、「イクヒカリ」は、収量性が高く、耐倒伏性に優れるが、高温登熟性が劣ることから玄米外観品質が問題となっている。そこで、収量性が高く、耐倒伏性、高温登熟性に優れた「西南136号」を育成し、2015年1月に本県の適品種に採用した。今回、安定的に多収・高品質を得るための移植時期・窒素施肥量について検討したので報告する。

【材料および方法】

2011～2012年に「西南136号」を3月下旬と4月中旬にそれぞれ移植し、移植時期が出穂期や収量等に及ぼす影響を検討した。施肥試験では2011年に、基肥、穂肥の窒素施肥量がいずれも「コシヒカリ」施肥基準（基肥窒素量0.4kg/a、穂肥窒素量0.2kg/a）の2倍および3倍となる区を設け、多肥条件下で栽培を行った。2012年には穂肥窒素量を基準である0.2kg/aで固定し、0.4～0.8kg/aの範囲で基肥窒素量の異なる区を設けて、「西南136号」に最も適した窒素施肥量を検討した。

【結果および考察】

「西南136号」において、3月下旬から4月中旬までの移植では移植日に関わらず、出穂期は7月上旬、成熟期は8月上中旬頃となり、収量は「コシヒカリ」に比べ、安定して多収であった(表1)。

表1 移植時期の違いが出穂期等に及ぼす影響

実施年度	品種・系統名	区名	移植日		出穂期		成熟期		玄米重 指数
			月日	月日	差	月日	差	(kg/a)	
2011	西南136号	3下	3/31	7/4	(+9)	8/8	(+13)	63.8	(132)
		4中	4/15	7/10	(+11)	8/13	(+13)	62.1	(104)
	コシヒカリ	3下	3/31	6/25	(+0)	7/26	(+0)	48.2	(100)
		4中	4/15	6/29	(+0)	7/31	(+0)	59.7	(100)
2012	西南136号	3下	3/29	7/3	(+13)	8/7	(+15)	67.3	(142)
		4中	4/17	7/8	(+10)	8/9	(+10)	56.5	(111)
	コシヒカリ	3下	3/29	6/20	(+0)	7/23	(+0)	47.4	(100)
		4中	4/17	6/28	(+0)	7/30	(+0)	51.1	(100)

注1) 両年とも窒素施肥量は、基肥0.4kg/a、穂肥0.2kg/a。  
2) 栽植密度の実測値は、平成23年度が23.5株/m<sup>2</sup>、平成24年度が20.5株/m<sup>2</sup>。  
3) 「差」は、「コシヒカリ」との比較。

2011年の「西南136号」では、「コシヒカリ」施肥基準に比べ、2倍の窒素量を施用することで穂数が増加し、収量が14%増加した。しかし、窒素を3倍施用しても、穂数が更に増加することではなく、収量の増加も認められなかった(表2)。穂数の増加は増収効果の主たる要因と考えられ、穂数には基肥の影響が大きいことから、2012年には基肥窒素量のみを増施した区を設けた。基肥窒素量を0.6kg/aにすることで、穂数が増加し、2割程度の増収効果が得られたが、これ以上施用しても収量は増加しなかった。「西南136号」の施肥基準として基肥窒素量0.6kg/a、穂肥窒素量0.2kg/aが適当であると考えられた(表2)。

いずれの施肥条件下でも「西南136号」は「コシヒカリ」に比べ、明らかに玄米タンパク含有率が低く、この傾向は多肥条件下で顕著であった。また、「西南136号」は「コシヒカリ」に比べ、耐倒伏性に優れることが認められた(表2)。

以上のことから、「西南136号」において安定的に多収・高品質を得るためには、窒素施肥量は、基肥で0.6kg/a、穂肥で0.2kg/aをめやすとすることが望ましい。

表2 窒素施肥量が収量等に及ぼす影響

実施年度	品種系統名	区名	玄米重 (kg/a)	同左 指数	収量構成要素				全穂数 (1000/m <sup>2</sup> )	倒伏 程度 (%)	玄米 タン パク 含有率
					穂数 (本/m <sup>2</sup> )	一穂 粒数 (粒)	登熟 歩合 (%)	玄米 千粒 重 (g)			
2011	西南136号	0.4+0.2	66.8	(100)	391	75.0	90.0	23.1	284	無	6.64
		0.8+0.4	76.2	(114)	424	76.6	88.8	22.4	352	微	6.78
		1.2+0.6	74.5	(112)	443	76.6	89.7	21.8	392	甚	7.64
	コシヒカリ	0.4+0.2	42.1	(100)	381	47.9	84.2	20.2	226	微	7.56
		0.8+0.4	48.4	(115)	463	62.6	71.7	19.8	267	甚	8.33
		1.2+0.6	46.1	(110)	438	59.9	77.2	18.8	331	甚	9.01
2012	西南136号	0.4+0.2	56.5	(100)	423	64.4	84.3	23.7	229	無	5.91
		0.6+0.2	66.9	(118)	474	66.1	84.2	23.5	323	無	6.05
		0.8+0.2	66.9	(119)	525	63.9	78.4	23.4	337	無	6.05
	コシヒカリ	0.4+0.2	51.1	(100)	446	59.0	79.8	20.8	250	無	7.32
		0.6+0.2	48.9	(96)	552	65.8	67.5	20.9	329	少	7.18
		0.8+0.2	49.5	(97)	564	62.9	66.0	20.3	376	中	7.68

注1) 「区名」は、a当たりの「基肥窒素量(kg)+穂肥窒素量(kg)」を表す。  
2) 「0.4+0.2」区はコシヒカリの施肥基準。( )は「0.4+0.2」区を100としたときの指数。  
3) 登熟歩合は、抜き取り株3株を比重選(比重1.06)で調査した。  
4) 移植日は、平成23年が4月1日、平成24年が4月17日。  
5) 両年とも栽植密度の実測値は、概ね21.2株/m<sup>2</sup>。